

# 表現を広げ深める部会

部会長：附属高等学校 三浦高之

部会員：附属小学校 堀井武彦

附属中学校 君和田雅子・桐山瞭子・戸谷順子・向田瑞貴

附属高等学校 河西静香・原大介・丸山実花

## 部会紹介

### 「生徒の思った事・感じた事を表現する活動」

本部会では、これまで「探究力・活用力」の育成をテーマに研究を重ねてきた。各教科や発達段階による「探究力・活用力」のとらえ方は様々である。子どもたちが表現を育む際に、先を見通して仕組んだり仕掛けたり、生徒が表現したいことを素直に安心して出せる環境（場や機会、人間関係等）をつくり出すことが、教員にとって重要である。また、彼らがそれぞれの発達段階までに積み重ねたものを無にせず、それらがスパイラルに高まっていくことを支援していくことも大切であろう。

本部会では、「表現する」ことにおける「探究力・活用力」を、教科学習によって獲得される「道具としてのスキル」の部分と表現活動を豊かにするための「発想を実現する力や姿勢」の部分の両面があると考え。それらが両輪として相互にうまく作用し合うことにより、表現活動をより豊かなものにしていくことができる。今日、子どもたちが社会の中で生きていくときに、自分の好きなことと納得がいくまで向かい合い、様々なメディアを活用し、創造したものを自分なりの判断力を持って発信していくことが、子どもたちが表現するということにおいて、探究・活用する姿ではないかと考えている。

私たちはこれまで部員相互での保育・授業の共有や教師自らによる表現活動の体験、外部講師の講義等を経て、自らの表現観を磨きつつ、その体験を活かし、カリキュラム化や教材化を目指し、それぞれの授業・保育実践を行ってきた（次項参照）。その中で、様々な発達段階や教科領域の教員が「表現」という一つの共通の課題に向き合うことで、実に多様な表現教育の可能性を探るヒントが得られてきた。また、私たちが考える「表現」には他の発達段階や表現を支える媒体の多様性を再認識し、相互間には重なる部分（共通性）と重ならない部分（独自性）があり、それらを丁寧に見取っていく必要性も感じられてきた。引き続き、それぞれがさらに深く考察し、さらなる表現カリキュラムの開発に励み、共有を重ね、より多面的・多層的・多角的に表現教育を考えていきたい。

## 「小中高の接続を意識した開発研究」

表現を広げ深める部会

附属小学校 堀井武彦

附属中学校 君和田雅子・桐山瞭子・戸谷順子・向田瑞貴

附属高等学校 河西静香・原大介・丸山実花・三浦高之

### （１）当該テーマに関する本部会の課題

昨年度までの研究では、人との対話において言語以外での表現方法に焦点を当て、研究を進めた。本部会では、人と人が言語を用いて話すタイプの対話だけではなく、教科ごとの特性に応じた対話的な活動があると捉えている。例えば、人と言語を使った対話以外には、色と形や音、身体を使った表現など、様々な対話方法が考えられる。今年度は昨年度の研究を基にさらに発展させるため、本年度の本部会の課題として、「生徒の思った事・感じた事を表現する活動」に焦点を当て、研究を進めていくこととした。

また、本部会の課題の「生徒の思った事・感じた事を表現する活動」を目指す実践の取り組みとして、本部会で継続して研究を行ってきた「お茶大コンピテンシー等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した開発研究」と関連させて研究を行った。本部会では、「お茶大コンピテンシー等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した開発研究」を一過性のものや特定の教科のみでしか活用できないという考えではなく、教科横断的な共通の取り組みとして実践できる教育と捉え、「幼小中高大の接続」を意識した実践を各教科で考えることとした。今年度の本部会は附属幼稚園の部員がいないため、所属部員で可能な範囲で実現できる取り組みを考えていくために、「小中高の接続」という視点で研究を進めた。

### （２）課題に関する本部会の取り組み

#### 【音楽科】

中学校・高校の音楽科では同じ楽曲「ふるさと」を教材として用い、生徒がどのように表現を高めようとしているか、発達段階をふまえた成長の過程を観察した。

#### ①附属中学校 向田瑞貴

6月中旬、1時間の授業を行った。楽曲の基本情報（作詞作曲者、時代背景、楽曲の形式）を学び、それをふまえてグループワークを主体として以下の2つの項目について考えた。

1. どのように歌えばこの曲の良さがオーディエンスに伝わるのか
2. どのように歌えば自分たちの表現したいことが伝わるのか

これらを言葉で説明したり、教科書に記号など書き込みしたりしながらグループ内で練習を行った。また、工夫できる点として歌唱するときに工夫できる観点として、強

弱の変化、音色（今回の場合は声色）、発声、形式による変化、子音の発音を提示していた。そして、これらを生かして1～3番のうち1つを歌で発表した。

以下は生徒たちの意見である。

【1. どのように歌えばこの曲の良さがオーディエンスに伝わるのか】

- 「かのやま」をどんどん高く
- 「こぶな釣りし」をどんどん高く
- 「う」を水に飛び込むみたいに歌う
- 「わすれがたきふるさと」⇒強く、きれいな音色、つなげる感じ
- 全体的に優しく歌う
- 母音を強く、長く（長すぎず）
- 文の初めを強調する
- 口をはっきり動かし、一言一言はっきり
- メゾフォルテとフォルテがあるから、フォルテを強調して歌ってみる（楽譜通りに）
- 息継ぎの場所を合わせる
- 語尾を穏やかに（デクレッシェンドにしつつ）することで故郷に思いを馳せている様子を出す

【2. どのように歌えば自分たちの表現したいことが伝わるのか】

◎自分たちの表現したいこと

- A（うさぎ追いし～、小鮒釣りし～、忘れがたき～）：故郷の恋しさを表現する
- B（夢は今も～）：今までとこれからの決意（強い思い）
- 楽譜の符号通りに歌ってみる

◎そのためにどう工夫するか

- Bで頭声をしっかり出す。他の部分に比べてはっきりと力強く出す。
- Aでは故郷を恋しく思っているように、優しい音色で歌う。特に『忘れがたき故郷』が一番優しく。
- 強弱を強調する

成果としては、一般的に歌唱の際気をつけるべきポイントをおそらく小学校で学んできたであろう既習事項を生かして確認することができたことである。小学校でも教わるであろう口の動かし方や、フレーズの始めと終わりを丁寧に歌うこと、息継ぎを合わせることなど、小学校（附属小・それ以外の小学校を問わず）で学習してきたことをお互いが確認し合える機会となったといえる。

課題点としては2点挙げられる。1点目は、工夫点の要素を示したもののそれぞれの要素の認識を正確にさせることができていなかった点である。本来、音程が決まっている楽曲で「高く歌う」や「低く歌う」を実現することはできない。書いてある音程に沿

って工夫できるのは、強弱や音色の変化であることを中学 1 年生の時点では正確に押さえる必要がある。2 点目は、これら生徒が挙げた気をつけたいことと実技とが明確に結びつかないことである。中学 1 年生では気をつけるべきことを挙げることや議論することはできても、具体的な実技とは結び付かない現状が見られた。学年を重ね、合唱の練習などの経験を積み上げることにより、少しずつ言葉と実技が結びついていくことが予想される。言葉と実技の相関を意識した指導が今後ますます必要であることが明確になった。

### ②附属高校 原大介

現在、小学校から高校にわたって教科書に掲載される唯一の楽曲《ふるさと》（文部省唱歌：高野辰之作詞・岡野貞一作曲）を題材に、高校生ならではの表現方法を考えさせた上で少人数による発表を行った。その際、同曲が小学校、中学校においても扱われていることを知った上で、それぞれの校種でどのようなコンピテンシーが育成されることを期待されたのかを生徒自身に考えさせ、自由記述したものをカテゴリー別に分類した。さらに、全ての校種に同曲が掲載されている理由についても記述させた。

附属高等学校では1年次に「芸術Ⅰ」を2単位、2年次に「芸術Ⅱ」を2単位選択する。「芸術Ⅰ・Ⅱ」では「音楽」「美術」「書道」のいずれかを必修しなければならない、1学年120人における人数比はおおよそ45、40、35である。今回の自由記述の対象は「音楽Ⅱ」受講者とし、35名からの回答を得た。カテゴリーについては提出された記述の傾向をもとに、学習指導要領の【共通事項】（音楽の諸要素）と、評価規準である「知識」「技能」、また国語的理解、感情と表現、多元的理解、他者理解等とした。

表1 高校生が考える「《ふるさと》で各校種が学ぶべきこと」

| カテゴリー   | 共通事項  |     |    |               |             |    |       | 知識・技能       |     |       |        |    | 国語的理解 |    | 感情と表現   |       |      | 多元的理解 |         |        | 他者理解等 |        |
|---------|-------|-----|----|---------------|-------------|----|-------|-------------|-----|-------|--------|----|-------|----|---------|-------|------|-------|---------|--------|-------|--------|
| 下位カテゴリー | 音色・声色 | リズム | 速度 | メロディ・旋律・日本の響き | 音の重なり・斉唱・合唱 | 強弱 | 形式・構成 | 音楽記号・楽譜の読み方 | ブレス | その他楽語 | 歌い方・発声 | 音程 | 歌詞の内容 | 発音 | 雰囲気・気持ち | 歌の楽しさ | 表現方法 | 情景と旋律 | メロディと強弱 | テンポの変化 | 作者の思い | 自分への投影 |
| 小学校     |       |     |    | 2             | 18          |    | 2     | 5           |     | 2     | 1      | 3  | 16    |    | 6       | 2     | 2    |       |         |        | 1     |        |
| 中学校     |       |     |    |               | 14          | 16 | 1     | 18          | 5   |       |        |    | 3     | 1  |         |       | 5    | 3     |         | 1      | 3     |        |
| 高等学校    | 7     |     | 2  | 2             | 1           |    | 1     |             |     |       | 7      |    | 15    | 2  |         |       | 4    |       | 12      |        | 3     | 1      |

高校生が考えた「小学校～高等学校の教科書に《ふるさと》が連続的に掲載されている理由」について自由記述した、主なものは以下の通りである。

○世代を超えた普及、共通の話題（12件） ○教材の平易さ、扱いやすさ（12件）  
○民俗的・日本の響きと学び（9件） ○表現方法の成長（7件） ○歌詞の解釈の成長を実感する（5件） ○父母を大切にすること（2件） ○合唱（2件） ○曲の構造（2件）  
（考察）

特筆すべき点として、中学生について「強弱」の指摘が多いこと、また「歌詞の内容」についての記述が一旦減少することがあげられる。さらに「ブレス」の項目が新たに増えたことは興味深い。これらは小学校から中学校への思考的な成長の中で、抽象化された語句への音楽的理解を生徒自らが実感したことに他ならないのではないかと推察される。また高等学校では、「メロディと強弱」「歌い方の変化」「表現の工夫」など、より多角的な視点で音楽が捉えられていることが読み取れる。このように、小学校から高等学校につながるスパイラルな学習の中で、コンピテンシーの育成が生徒たちの実感を持って行われていることは、「音楽」という教科が学校教育における成長過程において有意であることを示しているといえるだろう。

## 【美術科】

### ①附属小学校 堀井武彦 造形教育における異校種の連携について

幼児教育は「造形」、小学校は「図画工作科」、中学校は「美術科」と造形教育の呼称が違ふ。ついでに付け加えるなら、小学校の「図画工作科」は中学では「美術科」と「技術科」に分けられる教育課程の構造になっている。学習主体の対象年齢が異なることは自明であるにせよ、果たして学習内容のどこが違うのかを指導者が捉えていなければ、橋渡すための「連携」の手立てが見えてこないことは言うまでもない。

本学附属小学校の図画工作部では「アートメタ認知」という創作概念を立ち上げて、「**身体性を発揮し、アトリエ的な環境や他者（モノ・コト・場・人等）に関わり、つくりながら、知未感の対象をわかっていく**」というわかりかた』と定義し、実践検証に取り組んで来た。ようするに定量的な認知に偏ることなく、定性的な対象を身体的な知覚を活かしてバランスよく世界を捉えていくことの大切さを問うという主旨を埋め込んでいる。また、「アートメタ認知」は教育の主体である教師にも『教育的鑑識眼』と『教育批評』を支える資質・能力として求められる概念であると考えている。

一方で、子どもたちを取り囲む視覚情報の急激な進化と変容は正に未知未感の対象である。しかしながら、これからの造形教育でも、未知未感の対象の“テクスチャ”、換言するなら「手ごたえ、実感」には着目したい。それは、デジタルかアナログかの対立構造を乗り越えた地平に立ち上がってくるであろう。勿論、その基盤となるのは「アートメタ認知」である。

## 【参考文献】

- ・お茶の水児童教育研究会『第82回教育実習指導研究会発表要項』（2020），p88
- ・エリオット・W・A(1991)『啓発された眼 教育的鑑識眼と教育批評』池田史志・小松佳代子訳

## ②附属中学校 桐山瞭子

### 「道具と素材において連携できること」中学校美術科「工芸」分野の道具・素材とのかかわり

中学校美術科の表現の活動は、「絵や彫刻などの感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」および「デザインや工芸などの目的や機能などを考えた表現」の2つの柱がある。今回、表現を広げ深める部会内での図画工作・美術科の発表において共通して「道具と素材」をテーマとしたため、附属中学校ではそれらに最も親和性の高い工芸分野に焦点をあてて発表した。

附属中学校では、3年間で様々な材料を使った工芸作品制作を通して表現の活動を行っている。材料の内訳として、1年次、石(滑石)、2年次、木(桂材)、革(牛革)、3年次、金属(真鍮)を扱っている。

1年次では、「滑石のペーパーウェイト」と題し、皆使用目的は基本的に同じものであるが、殆どの生徒にとって初めて扱う滑石という材料からイメージを膨らませ、自分自身を含めた「誰がどのような場面で使うものであるか」を考えながら制作を行っている。ペーパーウェイトにおいては、紙をおさえるという機能があれば、基本的にデザインは自由度が高いことから、デザインの決定に際しては、前述の様に使い手を考えることをポイントとし、工芸分野の学習の入り口としている。

2年次には、中学生にも扱いやすく、木材の中でも比較的柔らかい材料である桂材を選択して扱っている。ここでは、題材名を「誰かのためのデザイン」としている。作者であるそれぞれの生徒にとっての大切な存在を想い、作品を制作するという、相手意識を全面に打ち出した題材である。木は、殆どの生徒が小学校の図画工作の学習で扱っている材料であるが、この題材では生徒たちが材料経験を持ち合わせていることで、使い手を想ったデザインが叶えやすいということも踏まえて材料を設定している。1年次は材料との出会いをメインとしたねらいもあるが、2年次においては、デザイン・工芸分野の学習の根源となる機能性を考えたり、使い手を想ったりして制作するという活動をメインとしている。

3年次では、金属(真鍮)を使った「ブラス・キーホルダー」を制作している。3年間で扱う工芸作品の材料としては最も難易度が高く、すぐには思い通りにならない材料を扱うことで、これまで経験した材料で扱った道具を扱えるだけでなく、適材適所で使い分けられることも求めて表現につなげている。ここでは、2年次とは異なり、作品は誰にあてても良いとするが、生徒祭で展示することも一つの大きな目標となるため、作品完成後に「ラッピング」と称して作品の世界観をより表現できるパッケージデザインを施している。生徒たちは、

これまでの作品と異なり色付けが不可能となる金属の作品に対して、どのようなコンセプトを持って制作したかを鑑賞者側に伝えるために、ラッピングにも力を注いで表現している。

3年間の中学校の工芸作品を通した表現の活動では、小学校図画工作・高等学校美術科と「道具と素材において連携できること」として、以下をあげる。

- ・小学校で経験した材料体験に、より自我の強い“意志・思い”をのせる
- ・「素材」×「道具」の心地よさの再認識
- ・適材適所の「道具」・「素材」の取捨選択
- ・温かみや良さ、知ることによって日常に息づく「素材」への感受を持つ

今後も、様々な表現や鑑賞の活動を通した図画工作科、美術科との連携を図っていきたい。

### ③附属高校 三浦高之

附属高校美術科では、まず初めに高等学校美術科における生徒の活動や指導から受ける印象から考察を始めた。高校生に小中学校の図画工作科と中学校美術科の活動でどんな時に「楽しさや発見する喜びを感じるのか」について聞き取りやアンケートを行った。聞き取りやアンケート結果として、「作品を生み出した時」、「身体の動かした時」、「鑑賞活動をした時」、「素材の感触を感じた時」、「道具を扱う面白さを感じた時」など、様々な場面で生徒が感じていることがわかった。また、どのような時に「成功体験と挫折を感じたのか」についての聞き取りでは、成功体験として「展覧会での展示体験」、「作品を完成させた経験」、「計画通りに制作が進められた経験」などの意見がでた。挫折を感じた場面では、「思い通りに上手くいかない時」、「周りの人や作品と比べて自分の作品が見劣りする感覚を持つ時」などであった。

これらの生徒の感覚を基に高校美術科では、「小中高の接続を意識した開発研究」についての取り組みを行うために、授業を行う上での3つの指導の視点を考察した。1つ目に、小中での経験や積み重ねてきた生徒の知識・技能を最大限生かす実践を目指す。2つ目に、生徒の経験に応じた指導を重視し、成功体験を積み重ね、意欲を高める題材の研究を進める。3つ目に、小中での経験を活かし、年間で多くの題材を経験させ、様々な場面で成功体験を積み重ねる指導を目指すことである。

次に、図画工作科、中学校美術科、高等学校美術科の学習指導要領の目標における共通点である、「造形的な見方・考え方」に着目して考察を進めた。造形的な見方・考え方とは、「感性や美意識、想像力を働かせる」、「対象や事象を造形的な視点で捉える」、「自分としての意味や価値をつくりだす」である。この視点を小中高の共通の視点として、「道具と素材」において連携できる授業実践を考えた。「感性や美意識、想像力を働かせる」では、道具と素材の活用方法を工夫することや表現に応じた道具や素材の選択ができるような教材開発を行った。続いて、「対象や事象を造形的な視点で捉える」では、素材の特性を理解する（質

感、硬さや可塑性など）や素材から生まれる表現（色や形、マチエールなど）を意識した指導を行った。最後に、「自分としての意味や価値をつくりだす」では、制作前にコンセプト（制作意図）を明確にすることや作品作成のプロセスの中での発見を生かす指導を目指した。これまでに述べてきた授業における指導の視点を基に部会では、「展覧会の企画」、「日本画」、「ストップモーション・アニメーション」の授業実践を紹介した。ここでは「日本画」の実践を紹介する。

日本画の題材では、「感性や美意識、想像力を働かせる」と「対象や事象を造形的な視点で捉える」の視点を意識した授業展開を目指した。日本画では、独自の道具や素材を使用し、時には自身の指を使用しながら混ぜる、砕く、練るなど、五感で素材の特性を感じる活動が多く存在する。また、絵画なので描く行為があるのだが、描くことに苦手意識のある生徒でも、普段見慣れない日本画独特の「道具と素材」に触れることで、描く行為以外の新しい「造形的な見方・考え方」に関する発見が生まれる機会を提供できると考えた。この「道具と素材」に能動的に関わりながら作品を制作する点は、「感性や美意識、想像力を働かせる」における視点である。

描画表現に関しては、水と膠を筆に多く含んだ状態で描くと水彩風の表現になり、水と膠よりも顔料や胡粉を多くすることで、油絵やフレスコ画で描いたようなマットな画面を表現できるなど、生徒それぞれの思考に応じた描画方法を選択することができる。この点は、「対象や事象を造形的な視点で捉える」の視点で、顔料や胡粉、膠など日本画独特の素材の特性を理解し、素材から生まれる色や形、マチエールなどの表現を体験しながら描画することをねらった。

今回の実践成果として、小中高での指導や題材設定における「共通の視点」の一つを導き出すことができた。今回の開発研究の成果を基に、今後さらに「小中高の接続を意識した開発研究」を進めるべく、部会で連携を図りながら実践を行う。



図1 【水干絵の具を混ぜる様子】



図2 【胡粉団子を作る様子】

#### 【参考文献】

武蔵野美術大学 造形ファイル アートとデザインの素材・道具・技法「水干絵具」

<https://zokeifile.musabi.ac.jp/水干絵具/>（参照日:2025/03/04）

武蔵野美術大学 造形ファイル アートとデザインの素材・道具・技法「胡粉」

[https://zokeifile.musabi.ac.jp/wpwp/wp-content/uploads/2014/08/224\\_gofun.pdf](https://zokeifile.musabi.ac.jp/wpwp/wp-content/uploads/2014/08/224_gofun.pdf)（参照日:2025/03/04）



## 【国語科】

### ①附属中学校 戸谷順子

附属中学校では、中学2年の6月に実施している林間学校に合わせ、様々な学習を行っている。今年度は美術科と国語科のコラボレーション授業として、「アートポエムの制作」を行った。「アートポエム」とは、詩画で有名な星野富弘さんの作品（詩画）にヒントを得たもので、自作の詩をA4版の色紙に書き、そこに生徒自らが色をつけたり絵を添えたりして一つの作品にしたものである。

中学1年の国語では様々な詩に触れ、詩の表現技法を学ぶ。美術科では中学2年でモダンテクニックを学び、その技法を用いてアートポエムを制作していく。詩の創作については、「詩の長さは自由。連の数も自由。詩にタイトルをつけるかどうかは自分の判断で。」と伝えた。実際、星野さんの作品でも詩の長さはまちまちであり、複数の連があるものもそうでないものも存在している。星野さんの数ある作品集（詩画集）を授業で鑑賞する時間を取ったので、そのイメージを持ちつつ、生徒が思うように作品制作ができればよいと考えている。

この授業実践は、美術科と国語科双方の教科での学びと、宿泊行事という普段の学校生活とは異なる環境とによって成り立つ単位となる。アートポエムには、自ら紡いだことばと、描きたい世界とが一枚の色紙に表現されるものであり、それが仲間と過ごした思い出と重なる作品になるのだ。

残念なことに2024年春、星野富弘さんが逝去された。今後も星野さんの作品を授業で紹介しつつ、美術科と協力しながらアートポエムの創作ができるとよい。

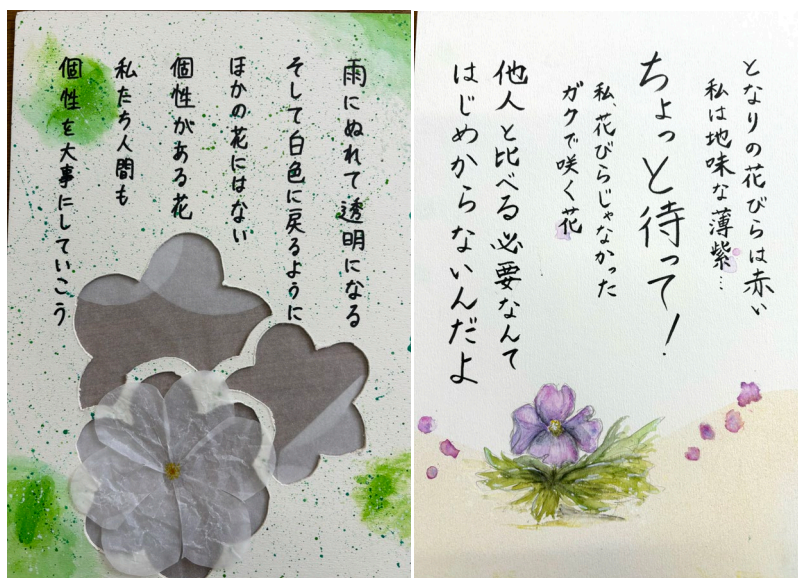


写真 生徒の作品

## 志賀高原で詩を作ろう！

- ①志賀の大自然に触れる！
- ②描きたい植物（自然）を決めておく！
- ③描きたい植物に合った詩を作る！  
（ここまでを夏休み中にやっておく！！）
- ④美術の授業で絵を描き、作った詩と合わせて一つの作品にする！
- ⑤皆さんの作品を生徒祭で展示！

図 授業で使った説明スライド

【参考文献】戸谷順子「星野富弘の世界」（2020年『お茶の水女子大学附属中学校研究紀要第49集』 <https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/692>

## 【保健体育科】

### ①附属中学校 君和田雅子

中学校では、1年次に男女共修で6時間、2年次に女子のみで12時間、創作と現代的なリズムのダンスの単元を行っている。3年次は5月末の体育大会に3学年縦割り4クラスで、総勢100名、3分半の作品を団ごとに「応援ダンス」として発表してきた。

体育の授業では、1年次は2人組から5、6人の生活班でのグループ学習、2年次は2～6名のグループ学習、ソロ作品づくりを経て、単元の最後に絵画「ゲルニカ」からイメージを広げたクラス作品「私たちのゲルニカ」で小ユニットの創作が大きな作品づくりに繋がることを学び、3年次の体育大会ダンスづくりに臨む。コロナ以前は、色別のチームごとにテーマを決め、音楽も生徒任せであったが、21年度からは全体テーマのもとに各チームでテーマを考える形とし、使用曲も共通とした。できるだけ全体の構成が覚えやすく、生徒に耳なじみのある楽曲を選び、BPMが120程度になるように速度に調整を加えた。

3年生は、4月の最初の授業に全体テーマと使用曲をふまえ、イメージを出し合って団のテーマを決める。このテーマはダンスだけでなく、団旗のモチーフにもなる。各団のカラーと、全体テーマから発想を広げ、生活班ごとに話し合って1時間でまとめ、構成図を全体で共有して見通しを持った。5月のGW明けより、総合の時間での2回の全体練習で、ユニゾンや構成などを1年生に共有し、衣装や小道具を工夫しながら2週間かけて昼休みや休み時間を使って仕上げていった。Google クラウドで動画を共有し、仕上がりを確認しながら、最後の一週間で団ごとにブラッシュアップしていった。

コロナ禍を経て、現在の応援ダンス創作のスタイルも4年目になった。密を避ける、時短などの制約はなくなり、創作の自由度は上がった。従来に比べ、授業での積み重ねがあるので、個々が見通しをもって創作できることで意欲は格段に上がっていると感じる。今後、高校でのダンスコンクールでは、そのスキルがどのように活用されているか、検証の機会が持てればと考えている。



### ②附属高校 丸山実花・河西静香

中学校でのダンス授業の経験や高校 1 年生のダンス授業で得た学びを活かしながら、本校の三行事の一つである「ダンスコンクール」に向けて作品を創り上げます。ダンスコンクールは昭和 23 年から続く伝統的な行事で、各クラスから選出された 2 名のダンスコンクール実行委員が中心となり、運営を行います。各クラスではダンスデザイナー、衣装係、音源係を決め、輝鏡祭の統一テーマを基に作品を制作します。ダンスを踊るだけでなく、コンクール形式で競い合う中で、テーマに沿った衣装や音源、プログラムに掲載するダンス解説文やイラストなど、さまざまな創作活動に取り組みます。準備は 7 月頃から始まり、輝鏡祭のテーマに沿ったサブテーマを各クラスで決定します。本格的な準備は 9 月中旬の文化祭終了後から進められます。これらの活動を通して、単なるダンスの技術だけでなく、多様な能力を発揮する機会が設けられています。



体育の授業では、1・2 年生ともにダンスコンクール前の 5 時間を練習時間として生徒に委ねています。この時間は、クラス全員が揃う貴重な場であり、隊形移動や振りの統一に重点を置いて練習を進めています。40 人という大人数で広いグラウンドという屋外の舞台で踊る経験は、時に困難を伴うものの、非常に価値のある体験です。特に多くのクラスがダンスの構成に力を入れ、約 5 分の作品の起承転結をどのように表現するかにこだわっています。その中で、自分たちの動きを俯瞰して捉え、修正する力が求められています。動画撮影などの工夫を取り入れながら、動きの見え方を意識した作品作りが進められています。

現在はコンクール形式ということもあり、生徒主体の活動が多くなっていますが、今後はテーマをさらに深める方法や、クラス全員が創作活動に関われる仕組みを検討していきたいと考えています。

### (3) まとめ

今回の取り組みでは、「お茶大コンピテンシー等の育成に関する幼小中高大の接続を意識した開発研究」を意識した研究を行った。当初は、異校種間や教科ごとに共通した指導感や教育観を基に実践することは難しいという印象があったが、研究を進めるにあたり教員間で情報共通し意識を高めることで、実践の可能性を認識することができた。今回の取り組みから、小中高大の接続に関して一定の共通した目標を設定し、教員間で共有しながら取り組むことで、教育実践の幅が広がった。

また、今回の研究を通し、小中高大の接続に対する開発研究を継続して取り組むことの必要性を改めて認識した。幼小中高大の接続に関する開発研究を進めていく上で、本部会のような活動が今後ますます重要となっていくと思われる。本部会以外でも、今後も継続して開発研究が続けられていくことが望まれる。